

Title	World Politics in Modern Civilization, By Harry Elmer Barnes, 1930, New York
Sub Title	
Author	恒松, 安夫(Tsunematsu, Yasuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.199(579)- 200(580)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

World Politics in Modern Civilization.

By Harry Elmer Barnes 1930, New York

著者はスミス・コレツヂの社會史學の教授である。従つて著者が本書に於て社會學的基礎に立ちて近世史を論述してゐることは一つの顯著なる特色として擧げなければならぬ事柄である。本書の目的とするところはアメリカ發見期以後に於ける世界の政治國際關係に於ける主要なる傾向を記述するに在るといふ。而して本書を通讀するに、著者の意圖は充分達成されてゐることは勿論であるが、その觀點の特異なる點に於て一般の世界政局の推移を取扱へる書物と甚だしく趣を異にしてゐる。殊に國民主義、資本主義、帝國主義を論述せる第一篇と近世資本主義、國民帝國主義を論述せる第二篇とは寧ろ純然たる文明史と見るべきものである。即ち著者は近世資本主義並に帝國主義發展の現階段に至るまでの背景を明かにするため、中世の舊式文化が崩壊して新型態の文明が発生するまでの過程を精神的物質的兩方面から能ふ限り緻密に記述しやうと企ててゐる。

本書の前半に於て最も特色あるは「ヨーロッパの膨脹と商業革命」と題する第三章と第四章であつて、前者に於ては顯著なる經濟的變化を述べ、後者に於ては一般文化の發達を述べてゐる。而して前者に於ては總ゆる經濟問題に論及してゐる。勿論この種の書物に於ては此等の問題を専門的に奥深く突進んで論ずること

は不可能であるが、著者は廣汎なる此等の問題を實に要領よく而も重要な統計や記録は出来るだけ引用して經濟學上の専門的智識を缺く者にも、容易に理解し得るやう記述してゐる點は敬服に値するものである。今試にこの章に於て取扱へる諸問題を列舉して見るに、航海術及び造船術の進歩、貿易類の増加、貴金屬供給の増加、物貨の變動、銀行業の興隆、保險、生産と株式取引（以下略）等の如きものであつて、此等は總て近世經濟史上重要な問題である。

第三篇以下は世界大戰直前から大戰後に至るまでの國際政局を論述するために費されてゐる。扱つてこの中で最も注目すべきは戰爭の責任に關する一章であつて、この章に於て著者は大戰の責任は總てドイツ側に在るのではなくして聯合國側に在りと斷定してゐる點である。著者自身、その序文に於てこれに對して辯明してゐるところによれば、一般に歴史家は生存中の人物に對して嚴正なる批判を加へることを遠慮し勝ちであるため兎角歴史的大事件もその關係者の生存中は公正に論議されないのであるが、彼自身はかゝる缺點を斷然排除して正しいと信ずるところを述べたと記してゐる。その態度たるや眞に尊敬に値するものである。然しながら、本書を讀むに當つて、著者はこの公平ならんとする態度に餘りに忠實ならんと努めた結果、却つて獨斷を生じたる嫌ひはないであらうかと思はれる點がある。即ち近來定説に近づきつゝある比較的公平なる大戰の責任論換言すれば大戰の責任は雙方にあるといふ説と比較して見れば、著者の説くところは餘りにドイツを辯護し過ぎるやうに思はれる。勿論著者はその論據として一々

文獻と資料とを擧げてゐるのであつて、單に一片の感情論では決してないが、それ等は主として聯合國側の責任を明にするためのもののみであつて、ドイツに關しては殆ど言及してゐないのは何の爲か了解に苦しむ次第である。然しながら、それがために本書の價値は決して損傷されるものではない。却つて聯合國側に對する容赦なき批判はこの問題に對する吾等の考察の一助となる點が多々にある。

之を要するに本書は細字にて組める菊版大の六百餘頁にのぼる大冊にて、相當讀み堪えのあるものである。而して問題の取扱ひ方に於ける著者の新しき態度は吾々に示唆するところ多大なりと信ずるものである。(恒松安夫)

寄贈交換圖書雜誌目錄

- | | | |
|----------------|------------------|-------------|
| 史前學年報 | 昭和七年の國史學界 | 史前學會 |
| 代々木會編 | 近代日本外國關係史 | 筑波研究部 |
| 田保橋 潔 | 上野國佐波郡赤堀村金井茶臼山古墳 | 刀江書院 |
| 後藤守一 | 田中萃一郎共譯 ヘルデル歴史哲學 | 帝國博物館 |
| 川合貞一 | 周髀算經の研究 | 第一書房 |
| 能田忠亮 | 史學概論 | 東方文化學院京都研究所 |
| 内藤智秀 | 織仁親王行實 | 高松書店 |
| 西洋中世史史料及考證一、二、 | 東方文化學院京都研究所 | 高松宮家 |
| 東方學報 京都第三冊 | 西洋中世史史料及考證の會 | 備後郷土史會 |
| 備後史談 九の五 | 朝鮮佛教 | 朝鮮佛教社 |
| 朝鮮佛教 八七 | 風俗研究 百五十六、百五十七、 | 風俗研究所 |

- | | |
|---|--------------|
| 伊豫史談 七十四 | 伊豫史談會 |
| 神社協會雜誌 三十二、五、六 | 神社協會 |
| 人類學雜誌 四十八、五、六 | 東京人類學會 |
| 上毛及上毛人 百九十四 | 上毛郷土史研究會 |
| かたな 三八五 | 中央刀劍會 |
| 金雞學院叢書 六七 | 金雞學院 |
| 皇 學 一の三 | 神宮皇學館友會 |
| 考古學 四の五、六 | 東京考古學會 |
| 考古學雜誌 二十三の五、六 | 東京考古學會 |
| 考古の大和 第六輯 | 東京考古學會 |
| 國 維 十三、十四 | 國 維 會 |
| 國學院雜誌 三九の六、七 | 國學院大學雜誌部 |
| 國民經濟雜誌 五四の五六、五五の一 | 神戸商業大學內高等研究所 |
| 國史學 十五 | 國史學會 |
| 國史回顧會紀要 十四 | 國史回顧會 |
| 郷土研究 七の五 | 郷土研究社 |
| El libro y el pueblo Tomo XI Numeo 3. | |
| Del Mexico Actual Numeo 3. 4. 5. | |
| Boletin oficial dela secretaria do rela cioneo exteriores Tomo LX. Numeo 4, 5 | |
| 民俗學 五の六 | 民俗學會 |
| 南方土俗 二の二 | 南方土俗學會 |
| 奈良文化 二十四 | 奈良文化編輯所 |
| 大谷學報 十四の二 | 大谷大學佛教研究會 |
| 歴史地理 六十一の六、六十二の一 | 日本歴史地理學會 |
| 歴史教育 八の三、四 | 歴史教育研究會 |
| 歴史と地理 三十一の六 | 史學地理學同友會 |
| 立命館學叢 四の九、十 | 立命館出版部 |
| 埼玉史談 四の五 | 埼玉郷土會 |
| 西洋史研究 三 | 東北帝國大學西洋史研究會 |